広島・尾道（おのみち）遺跡（ＫＧ〇七地点）

1　所在地　広島県尾道市長江一丁目

2　調査期間　第八次調査　一九八〇年（昭55）一〇月～一一月

3　発掘機関　尾道市教育委員会（尾道遺跡発掘調査団）

4　調査担当者　篠原芳秀（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〈当時〉）

5　遺跡の種類　都市跡

6　遺跡の年代　鎌倉時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

尾道遺跡は、「嘉応元年（一一六九）一一月二三日後白河院庁下文」（高野山文書『宝簡集』巻第一）をもって、尾道村田畠五町が大田庄倉敷地となされたことにより、港湾都市に発展していった「尾道」を対象とする遺跡であり、本州瀬戸内沿岸部のほぼ中央に位置する尾道市中心市街地一帯の、地下約一～四ｍに包蔵される。

（尾　道）

今回紹介する資料が出土した調査地は、西国寺山から南に向かって派生する丘陵「丹花（たんが）」の西側裾部に立地し、近世の石見・出雲路を踏襲する旧長江通りから、丘陵上に所在する福善寺への参道が始まる地点の北東側角にあって、通りに西面する。

間口六ｍ奥行三〇ｍの東西に狭長な敷地内に設けられた五つの調査区ＫＧ〇四～〇八のうち、奥側の〇七区の最下層黒色土中から、室町時代後期に位置付けられる土師質土器皿、連歯下駄などとともに木簡一点が出土した。なお、同区の下位層からは、同年に天寧寺境内調査地から出土した蓮華唐草文軒平瓦数種のうちの一種に類する瓦も出土しており、あわせて注目される資料となっている。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□　　(60)×(35)×5　081

上下端及び右辺が失われているため、形態を明らかにしがたい。片面に二ないし三文字程度の墨痕がわずかに認められる。

9　関係文献

尾道市教育委員会『尾道―市街地発掘調査概要―一九八〇』（一九八一年）

（宮本一輝）